口腔疾患の各種疼痛に対する

イルガピリン療法の経験

岡 達 染 矢 広 美

東京医科歯科大学口腔外科学教室（指導 上野教授）

Treatment with Irgapyrin in Case of Various Pains in Oral Surgery

Tōru Oka, and Hiromi Someya

From the Clinic of Oral Surgery, Dental Faculty, Tokyo Medical and Dental University

(Prof. T. Ueno)

Either peroral administration or intramuscular injection of Irgapyrin was tried in 20 cases complaining of severe pain chiefly due to oral cancer or temporomandibular arthrosis. Painrelieving effect could be obtained by Irgapyrin in cases of oral cancer with severe pain, in spite of no such effect by other medicine, and in almost all the cases of arthrosis with quite favorable results.

Edema was sometimes obscured as a by-effect, but it disappeared soon by discontinuing its administration.

緒 言

1884年アミノピリン（ピラミドン）が世に出て以来、その鎮痛作用は急性関節ロイマチスに特効があるとされていたが、水に易溶性でないので大量衝撃療法に使用する事は困難であつた。しかるに1949年 H. Stenzl はピラツオン誘導体のブタゾリジンの合成に成功した。これは元来水に溶け難いアミノピリンを高濃度に溶解する事が出来ると共にそれ自身鎮痛作用を有するので、アミノピリンとブタゾリジンとの等量30%混合溶液をつくりイルガピリンとして市販された。

我々は口腔領域に於ける他の薬剤では薬効の得られなかつた疼痛を訴える諸疾患の患者を選んで使用し好成績を得たので報告する。

臨床実験

我々の試みた症例は口腔癌9例、顎関節症7例、

アフタ性口内炎、下顎骨々折、三叉神経痛、エナメル上皮腫各1例で総数20例であつた。

投与は主として経口的に、一部は注射に依つて行つた。錠剤は一錠中にアミノピリン、ブタゾリジンを夫々0.125g、亦注射液は5cc中に各々0.75gを含んでいる。我々は錠剤1日6錠を毎食後に三等分して与え、注射は臀筋内に最大量を5ccとして症状に依り適宜増減して筋注した。両者の併用は行わなかつた。

効果の判定は全く鎮痛したものを $++$ とし、疼痛の軽減したものを $+$ 、全く鎮痛作用の認められないものを $-$ とし、再発を見たもの、および副作用のあつたものを特に備考欄に記入した。

実験成績

使用総数20例中著効を示したものの7例、軽快9例、他の3例は全く無効であつた。

口腔癌に依る疼痛は後頭部痛、患部痛、肩凝り

表 1

症例	氏 名	性, 年齢	病 名	疼 痛 部 位	投 与 方 法, 用 量	効果	備 考
1		♀ 48	エナメル上皮腫	側頭, 耳後, 側頸部	1日 3cc 筋注 7日間 1日 4cc " 3日間 1日 2錠 " 21日間	+	
2		♀ 49	顎 関 節 症	顎 関 節 部	1日 6錠 3日間	++	
3		♂ 48	三 叉 神 経 痛	下顎隅角, 頤部	1日 4cc 筋注 4日間 1日 6錠 4日間	—	浮 腫
4		♂ 60	口 腔 癌	頭 部	1日 6錠 4日間	+	再 発
5		♀ 15	顎 関 節 症	顎 関 節 部	1日 6錠 3日間 グリース照射	++	
6		♂ 45	"	"	1日 6錠 3日間	++	
7		♂ 28	"	"	1日 6錠 3日間	++	
8		♀ 42	"	"	1日 6錠 3日間	+	
9		♀ 37	"	"	1日 6錠 3日間	+	浮 腫
10		♀ 60	口 腔 癌	眼窩, 後頭部	1日 6錠 7日間	++	
11		♂ 54	"	顎下, 後頭部	1日 6錠 5日間	+	再 発
12		♂ 59	"	眼窩, 側頭部	1日 6錠 5日間	+	
13		♂ 38	顎 関 節 症	顎 関 節 部	1日 5錠 4日間	++	
14		♀ 29	アフタ性口内炎	舌, 後頭部	1日 6錠 2日間	—	口 渴
15		♂ 45	下 顎 骨 々 折	顎 下 部	1日 6錠 3日間	—	
16		♂ 46	口 腔 癌	後頭, 側頸部	1日 6錠 4日間	++	浮 腫
17		♂ 48	"	後頭, 側頸部	1日 6錠 9日間	++	
18		♀ 50	"	頭, 眼窩部	1日 5cc 筋注 4日間	+	再 発
19		♂ 57	"	後頭, 眼窩部	1日 6錠 4日間	+	"
20		♂ 50	"	後頭, 眼窩部	1日 6錠 4日間	++	

等を訴えるのを例とするが、投与開始後2～3日で概ね疼痛は消失した。しかし使用中止後例外なく4～5日で再発を見た。再発後の疼痛は投与前に比し比較的軽度となつたものが多かった。

顎関節症の際の疼痛に対しては7例中1例は副作用が顕著であつたが、全症例に於いて極めて良好な鎮痛作用が認められた。

三叉神経痛は1例であつたので速断し難いが、筋注および錠剤内服を数日連続したにもかかわらず効果はみられなかつた。

骨折時の疼痛、アフタ性口内炎に依る疼痛に対しても期待された鎮痛作用は得られなかつた(表1参照)。

考 按

此処に注目したいのは、現在まで他の薬剤を以ては奏効し得なかつた口腔腫瘍に伴う疼痛に本剤が唯一つ著効を示した事である。勿論中止後再

発をみたが、睡眠可能の程度の軽度のものではあつた。試みた此種症例では均しく後頭部頭痛および患部痛を訴えたが、本剤の鎮痛作用は先ず後頭部頭痛に、次いで患部痛に現われた。木村³⁾(1953)も胃癌末期の腰痛に本剤が極めて効果的であつたことを報告している。

第2に注目されたのは顎関節症に対しての効果である。使用した此の症例の殆んどは、顎関節部の自発痛、および開口時の疼痛、ならびに不快な衝突音の聴取される事を訴えるものであつた。本剤の使用後概ね2日目で漸次疼痛軽減し、その後消失をみた例は総数7例中2例であつた。此際全症例共理学的療法を併用したが、衝突音は依然として聴取されるものが多い。

本剤の薬理作用は既に多くの報告がある。Selingner⁵⁾(1951)は本剤のロイマチス性疼痛への奏効機序は筋肉の攣縮を取り去るためと云い、また

表 2 症例 I の 血 液 所 見

月 日		14/I	23/I	19/II	16/III	10/V
		イルガピリン 使 用 前	イルガピリン 筋 注 開 始	イルガピリン 筋注止め錠開始	イルガピリン 錠投与止め	退 院 時
白 血 球 数		6600	5975	7525	8950	9550
赤 血 球 数		384万	446万	336万	357万	453万
血 色 素 量		70%	75%	55%	53%	74%
血 沈 1 時 間 値		105mm	69mm	64mm	71mm	64mm
白 血 球 百 分 率	リ ン バ 球	14				23
	大単核移行型	2				3
	好エオジン細胞	4				3
	好塩基細胞	0.5				2
	好中性細胞核 桿状核	15				15
	好中性細胞分葉核	II				29
		III				26
		IV				8
		V				1
		VI				
		計	64.5			69

Mankel⁴⁾ら (1952) は ACTH の増加を促す作用があると報告している。さらに Mankel⁴⁾等は特にブタゾリジンを取上げて大脳皮質に対する麻酔作用、又は大脳皮質自律系に対する何らかの作用があると予想している。

イルガピリンの副作用は比較的少いが、長期使用すると、アグラヌロチーゼの如きものが現われると警告されている。我々の症例 I は 31 日にわたり使用したが、その血液所見は表 2 に示す如くで、特に本剤による影響は認められなかつた。しかし鎮痛以外の目的で他の薬剤をも多く使用したのでこの結果は遮断し難い。

副作用として嘔気もあるが、迷走神経刺激作用を有するためと考えられ、また浮腫はクロール代謝異常のためと云われる。我々は 2 例に軽度の浮腫、嘔気を認めたが休薬後直ちに消失した。

結 論

- 1) 我々はイルガピリンを鎮痛の目的で、口腔痛、顎関節症、口内炎、骨折、三叉神経痛の疼痛を訴える患者に試みた。
- 2) 経口的投与を主とし、一部には筋注を行った。
- 3) 口腔痛、顎関節症に対する鎮痛作用は概ね満足すべきものがあつた。

文 献

- 1) 堀 莊平：口腔領域の疼痛に対するイルガピリンの効果，口科誌，3 (2)：105, 昭 29.
- 2) 加藤邦男：イルガピリンと浮腫，綜合臨床 3 (8)：1249, 昭 29.
- 3) 木村忠司：イルガピリンの外科的臨床経験，綜合臨床 2 (6)：668, 昭 28.
- 4) E, Mankel：Butazolidin in Rheumatoid Arthritis and Gout, J.A.M.A. 149 (8)：729, 1952.
- 5) H, Selinger：Irgapyrin bei rheumatischer Erkrankungen. Über die Bedeutung der Schmerzbe-kämpfung. Ärztl. Wchnschr, 6:89, 1951.